

# ニシマカジキ 大西洋

White marlin *Kajikia albida*



## 管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

## 生物学的特性

- 最大体長・体重：下顎叉長 205 cm・67 kg
- 寿命：不明
- 性成熟年齢：不明
- 産卵期・産卵場：春、熱帯域
- 索餌期・索餌場：夏、温帯域
- 食性：おそらく魚類、イカ類
- 捕食者：大型歯鯨類、マグロ・カジキ類等が小型個体を捕食すると考えられる。

## 利用・用途

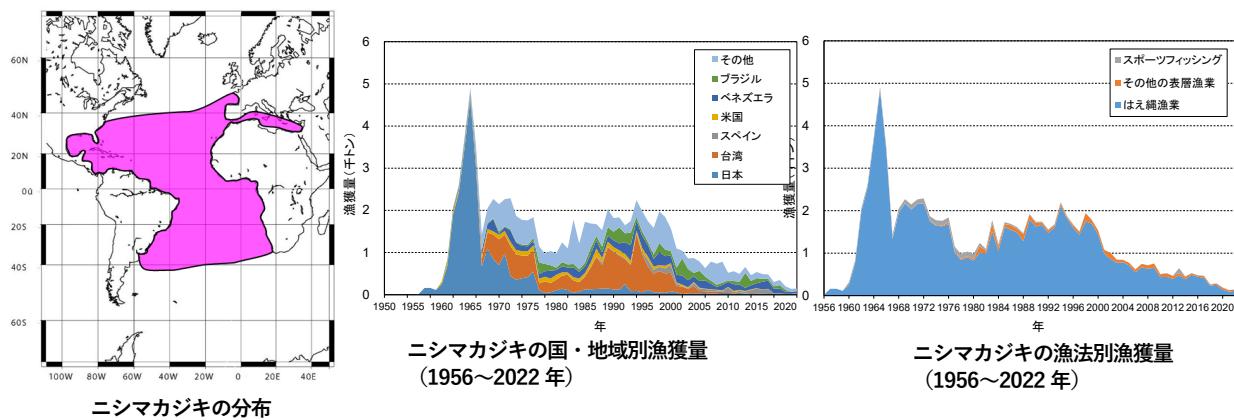
刺身、寿司、切り身（ステーキ）、マリネ等

## 漁業の特徴

本資源を主対象として漁獲している漁業は米国、ベネズエラ、バハマ、ブラジル等のスポーツフィッシングとカリブ海諸国やアフリカ西岸諸国の沿岸零細漁業であるが、漁獲量の大部分は台湾、日本、ブラジル等のはえ縄漁業の混獲によるものである。近年、ベネズエラ、トリニダード・トバゴ等のカリブ海諸国やブラジルの零細漁業の漁獲の割合が多い。近年、本資源の外見に極めてよく似たラウンドスケールスピアフィッシュ (Roundscale spearfish *Tetrapturus georgii*) という別種の存在が確認され、ニシマカジキの報告漁獲量にこの別種の漁獲が含まれていることがわかった。現在までのところ、ICCAT のニシマカジキの漁獲統計はこの 2 種と一緒に計上している。

## 漁獲の動向

本資源の漁獲の大半は、はえ縄漁業によるものであり、1980 年代半ば以降は南大西洋での漁獲が、北大西洋を上回っていたが、2010 年からは北大西洋の漁獲量がやや多くなっている。本種の総漁獲量は 1960 年代に約 5,000 トンまで達した後、1970 年代に 2,000 トン前後に急減し、2000 年までの間に 900~2,300 トンの間で推移した。その後総漁獲量は緩やかな減少傾向を示し、2009 年までは 700 トン前後で推移したが、2010 年以降再び減少し、2022 年は暫定値で 148 トンと報告されている。日本の漁獲量は、1990 年代前半までは 100 トンを上回っていたが、それ以降減少を続け、近年の漁獲量は 3~12 トンであり、2022 年は 3 トンであった。



## 資源状態

資源解析はベイジアンプロダクションモデル (JABBA) と統合モデル (SS3) を用いて実施された。漁獲量に対する不確実性を反映するために、SS3 を用いた解析では、投棄・放流をモデル内で推定するシナリオ (モデル 6) と、提出された漁獲データのみを使用するシナリオ (モデル 7) が使用された。3 つのモデルの資源評価結果を統合した結果、本資源はこれまで高い漁獲圧を受けてきたが、現在は漁獲圧も減少し、現在の漁獲死亡係数の水準は最大持続生産量 (MSY) レベルよりも低くなっている ( $F_{2017}/F_{MSY}=0.65$  : 95%信頼区間: 0.45 - 0.93)。一方、資源量はいまだに MSY レベルよりも低い状態 ( $B_{2017}/B_{MSY}=0.58$  : 95%信頼区間: 0.27 - 0.87) と考えられる。以上より本資源は、資源量は乱獲状態にあるものの、漁獲圧は過剰漁獲状態ではない。

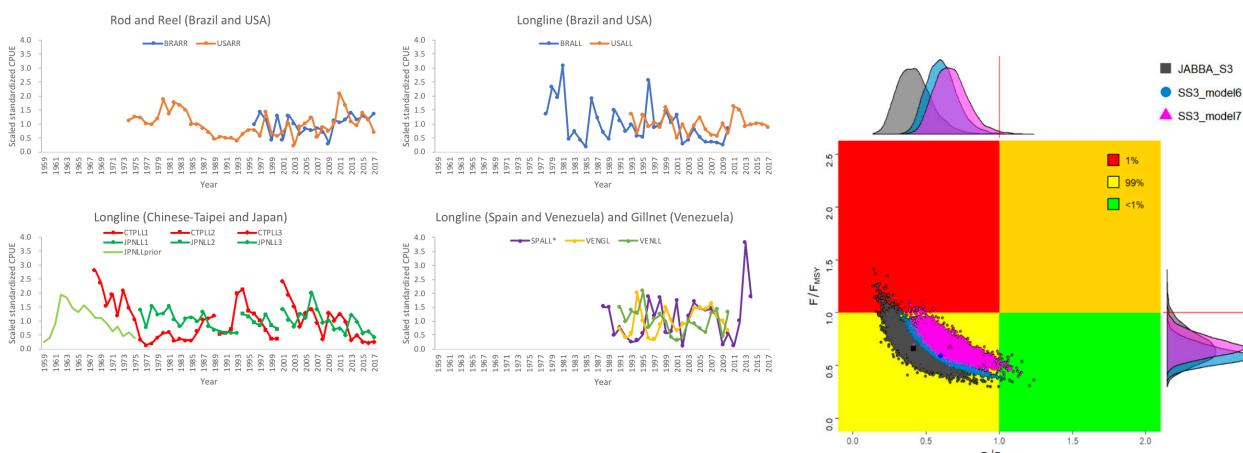
## 管理方策

2019 年に行われた資源評価結果を受けて、大西洋のニシマカジキ資源に対しては、2020 年以降の毎年の陸揚げ限度量を 355 トンとすることが合意された。日本の割当量は年間 35 トンである。また、生きて漁獲された個体は、できるだけ放流後の生存率が高くなるように放流することが勧告されたほか、資源解析・評価の実施に当たって問題となつた生存放流及び死亡投棄個体数の推定方法の検証、スポーツフィッシングに対してはオブザーバーの乗船 (カバー率 5%) 及びサイズ規制と釣獲物売買の禁止が勧告されている。

## ニシマカジキ（大西洋）の資源の現況（要約表）

世界の漁獲量* (最近 5 年間)	138~348 トン 最近 (2022) 年: 148 トン 平均: 228 トン (2018~2022 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	3~12 トン 最近 (2022) 年: 3 トン 平均: 8 トン (2018~2022 年)
資源評価の方法	ベイジアンプロダクションモデル (JABBA)、統合モデル (SS3) の結果を等ウェイトで統合した結果
資源の状態 (資源評価結果)	$B_{2017}/B_{MSY} = 0.58$ (0.27~0.87) $F_{2017}/F_{MSY} = 0.65$ (0.45~0.93) 2017 年の資源状態は、過剰漁獲ではないが乱獲状態である
管理目標	MSY (1,495 トン : 1,316-1,745 トン) 水準の資源量 (BMSY)
管理措置	2020 年以降の陸揚げ限度量を 355 トンとする (日本の割当量は 35 トン)。 スポーツフィッシングについてオブザーバー乗船 (5%)、サイズ規制、釣獲物の売買禁止。
管理機関・関係機関	ICCAT
最新の資源評価年	2019 年
次回の資源評価年	2025 年

\* 漁獲量には、いずれもラウンドスケールスピアフィッシュの漁獲が混入していると考えられる。



### 資源評価で用いられた漁業別資源量指数

EU スペインのはえ縄の指標 (紫色実線) は、感度解析のみに使用された。また、JABBA のベースケースモデル (モデル S3) は、1959~1974 年の日本のはえ縄 CPUE を使用していない。

### 資源評価結果 (神戸プロット)

資源評価の結果として、JABBA の S3 モデル (1959 年から 1974 年までの日本のはえ縄 CPUE を使用していないモデル) と SS3 のモデル 6 (投棄した漁獲をモデル内で推定した結果) 及びモデル 7 (投棄した漁獲を推定していない結果) が合意された。本資源は、資源量は乱獲状態にあるものの、漁獲圧は基準値 ( $F_{MSY}$ ) を下回っており、乱獲は発生していない。